

チャレンジは 動かす

未来につながる

社会を エネルギー

「共育」のバトン



公益財団法人スペシャルオリンピックス日本
理事長

有森 裕子 氏



ピーアークホールディングス株式会社
代表取締役会長兼社長

庄司 正英

今回は、バルセロナ・アトラクタのオリンピック女子マラソンで、2大会連続のメダリストに輝き、現在は公益財団法人スペシャルオリンピックス日本で理事長を務める有森裕子さんに、現在の活動やこれからのビジョンについてお聞きしました。

スペシャルオリンピックス日本と ピーアークとのつながり

庄司 有森さんとは初めての顔合わせとなりますが、お客様の代表として有森さんに実際の活動の内容、これからのビジョンなどについてお話を伺いますので、よろしくお願いたします。

さて、私たちピーアークのチャリティーはおお客様の参加型なんです。全店の店頭では支援を行っている団体の活動内容をお客様にもわかりやすいように、映像やポスターでアピールしています。それをお客様がご覧になって、景品交換の時に余った玉がでた

ら、お客様のご意志を確認して募玉にします。その数に相当する金額を当社が寄付をいたします。このように、営業を通じてピーアークのお客様が一体となって、社会貢献活動を支援していく「絆」モデルです。

有森 キャラクターのピーくんはとても身近に感じていたのですが、庄司さんとは、いろいろなタイミングが噛み合いませんでしたので、本日の対談を楽しみにしておりました。お客様が私たちの活動を理解していただいた上でご参加してくださっているんですね。それにしてもこの社会貢献のアイデアは素晴らしいですね。お客様もこのような形で社会貢献ができるの知って感心されたのではないのでしょうか。繋ぎ方の発想は実に意外で、とても美しいと思います。本当にありがとうございます。

スペシャルオリンピックスの 発祥は米ケネディ家

庄司 そう言っていただけで光栄です。それでは、まずスペシャルオリン

ピックス(以降、SON)について少しお伺いしたいと思いますが、この活動の始まりはアメリカのケネディ家が始めたことと聞いて驚きました。

有森 はい、そうお聞きになられて驚かれる方も多いのですが、ケネディ家には知的障がいの方がアミリーがいました。ユニスケネディ・シユライバーが知的発達障がいを持つ姉を通して見た社会を「これは違う」「こんな待遇はおかしい」と感じ、スポーツのデイキャンプを通じて、知的障がい者のことをもっと社会に知っていただくとう活動を始めましたのがSONの起点にあります。

庄司 なるほど。創業の地、竹の塚にも障がいをお持ちの方のための支援センターが有り、駅前でも施設利用のお子さん達を見かけていました。この活動に携わるまでは少し距離感があつて、何かお役立ちをするにも戸惑つてい



ましたが、スペシャルオリンピックス日本(以降、SON)の支援を始めてからは、気軽に声をかけられるようになりました。SONのお蔭で彼らがとても近い存在になりました。

有森 そうですか。私の場合、母が岡山の養護学校の事務をやつておりましたので、地域のイベントには必ず出席していました。ですから、障がい者の支援活動にも自然に入ることができましたね。この活動に参加するようになって、もっと幅広い意識で、知的障がい者の方をはじ

日常生活は一生続きます。SONを通して指導していくことは「生きていくこと」です。

先駆者として 乗り越えた壁

庄司 なるほど。私は、プロアスリートの草分け的存在ともなつた有森さんは、メダリストだからではなくスポーツ選手の「イノベーション」な存在になると思ひました。マラソン競技は忍耐と根性の象徴のイメージ

めいろいろな人と接するようになりました。今では自然体になりすぎて、逆にアスリートたちがびっくりしていますけれどね(笑)。

可能性を見つけ 「生きていくこと」を教えたい

庄司 アスリートとしての有森さんがSONに関わられてだいぶイメージが変わった印象がありますが、理事長を任されてからもうどれくらい経ちましたか？

有森 理事長職に就いてから、も

だったのですが、「自分をほめた」あの言葉で、新しい選手像がイメージされました。今、オリンピックへの参加選手は「オリンピックを楽しんできます」と皆さん言いますが、あの時代はプレッシャーでそんなことを言えるような時代ではありませんでした。でもあの一言を突破口にしてスポーツを楽しもう！その「イノベーション」が始まったのではないかと思ひています。

有森 そうですね、あのころまでは、日本のマラソン界という

う6年が経ちました。2002年に細川佳代子さん(SON初代理事長からドリムサポーターをやつていただけなのかとお話を戴きました。当時はSONのことは何も知らなくて、知的障がいをお持ちの方はスポーツをやらせてもらえないと知つて驚きましたね。でも私と同じようにスポーツで世界を目指す人がいるのであれば協力することを申し出ました。今では「スポーツで頑張つてきた時間」を活かせるようなセカンドキャリアに出会えたことを幸運だと思ひています。

庄司 なるほど、初代理事長の細川さんは彼らに惜しみなく愛情を注ぐというスタイルでしたが、有森さんに代わつてからは、同じアスリートとしての目線です、スポーツを通じてサポーターするというよりは、仲間というような雰囲気になつたのではないのでしょうか。

忍耐、根性、日本を背負つて走つた、円谷幸吉さんのイメージでした。私が現役で走つたあの時代は「思い切り自分の人生を兼ねて、アピールしていいんだよ」ということを認めてくれる方が増えた時代でしたので、私自身にとつても良かったですし、私の後に続くアスリートにとつても、あの一言が良いスタートになつたのかな？という思いは有ります。

庄司 名言ですね。私も実は銀行を辞めてパチンコ業界に入つて、最初は仕事が目白無かつた時代がありました。毎日お店に立つているとお客様からは今日も楽しんでなかつたという連呼とクレームの毎日でした。当時の業界の常識はお客様の損が店の儲けでしたが、商売の常識は両者の得が当たり前です。私自身この目の前の難題に向き合つてパチンコを時間消費型レジャーという新しい発想でビジネスモデル化にト

有森 いいえ、違います。あたり前の日常です。競技は普通にできるものとして、競技以外の時間にも「自分にはこれができる」という事をSONでは学んで欲しいと思ひています。なぜなら、そういうことが、アスリート達の今後の生活の大半を占めるからです。競技生活はある程度の期間で終わるのですが、生きていくための



点で再設定してパチンコのインベートに取り組みましたね。このチャレンジが(社)ニュービジネス協議会(現東京ニュービジネス協議会)に、旧態依然としたパチンコを業態改革したと評価され、アントレプレナー大賞を受賞し、そのご縁もあって今は副会長を務めています。

**「自分をほめてあげたい」
名言の背景にあったもの**

庄司 さて、常識を変えるとは、限界を超えること。当時のあの有森さんの名言に対する私の解釈は、自分の限界を越えて、自らの常識であるすべての壁を超えられた宣言、ということでした。自分をほめてあげたいという意味の真相を一番知りたいところですが、しかし、あれはすごいレースでしたね。

有森 そうですね。しかしあのレースを終えた後のインタビュー

ですね。我々ベンチャー経営者の掟は、チャレンジヤーであり続けることです。人生は挑戦の連続運動で、それを楽しむことですよ。

いま理事長自らが活動の中心と一緒に入って指導している姿は、素敵で楽しそうですね。彼らもすごく勇気づけられていると思います。11月に行われたナショナルゲームの福岡大会にはピーアークから10名のボランティアスタッフが派遣させていただきました。彼らはボランティアスタッフの一人として携わらせていただき、多くの経験をすることができただけでなく、全員がとても良い顔になって帰ってきました。参加することで彼ら自身が、選手の皆さんから元気をいただいたようです。

有森 今年はSONNにとって特別な大会になりました。まず、SOの御本家である、ケネディ家の方も交えての大会になりました。ナショナルゲームにインターナ

ハンディを超え、過去の自分を超え、
新たな未来にチャレンジする姿は
とても美しい。



人と人との出会いが
人生最高の栄養だと感じています。

シヨナルクラスの方々が足を運んでいただけただけのとはとても光栄なことです。来年はSOの世界大会がアメリカ・ロサンゼルスで開催されます。この流れは、SONの活動を広く社会に知らしめるには最高のタイミングでしたから、この千載一遇のチャンスを「しっかりと掴んで離さない」と気合が入りました。

庄司 私もメダル授与のお役目をいただき、当社のスタッフとともに勇んで参加いたしました。自分の壁を超えたアスリートをとたえる役目は大変光栄でした。ハンディを超え、過去の自分を超え、新たな未来にチャレンジする姿はとても美しいと感じました。

2020を目指して

庄司 ところで2020年に東京オリンピックが開催されますが、SONも何か計画されていますか？

有森 はい、私たちの世界大会はオリンピック、パラリンピックの前年に開催されるのですが、2020年にオリンピックが東京で開催される流れに乗って、私たちのSONをアピールできるようになればとモチベーションを上げていくところです。2019年の開催は難しいのですが、2023年に招致の場所として東京を入れたいなど思っていて各方面に働きかけをしているところです。

庄司 私たちにとっても2020年というのは長期経営ビジョンの最終年度で、「Fun for Life」私たちの仕事は、世の中を楽しくすることくをクレドに置いて、当社のミッションとして頑張っているところですよ。2023年の大会が決定すれば、グループを挙げてボランティアをさせて戴きましよう。

有森 ありがとうございます。お陰様でボランティアの方もここ数年増えたのはありがたいと

で、あの言葉を口にするまでには、バルセロナからアトラクタまでの4年という長い時間がかかりました。バルセロナを終え、私がアトラクタオリンピックに出るとは誰も思わなかったはずですし、故障もしました。いろいろな葛藤も重なりましたが、最後には自分を奮い立たせるために踵の手術も受けました。手術は成功したものの、五里霧中のようなところにメダルを獲得するという目標をおき、毎日の練習がチャレンジの連続でした。あの言葉はどれだけ周りから不可能と思われていても、それを乗り越えてメダルに到達したことに対して、自分自身に向けていた言葉でした。「何で頑張れなかったのかというレースはしたくはなかったし、今回はそう思っていないせし、初めて自分で自分をほめたいと思います。」という1フレーズが出てきました。

庄司 そのストーリーは感動創造

思っています。何よりも参加する方々が活動を通じて元気になっていくということ聞かされ、私たちもこの活動の奥深さを改めて感じていきます。私自身、この活動に係る皆さんが共に育つ団体でありたいまさに「共育」の場にしたいと思っこれからも活動を続けていきます。

Fun for Lifeの芽

庄司 ところで、有森さんは、自分を楽しむというイノベーションを起こされましたが、ご自身の「Fun for Life」はSON以外に何かありますか？

有森 SON以外での「Fun for Life」というと、社会貢献活動を通じて、自分もまた育ててもらっているというのは楽しんでいることの一つです。また、自分が一生懸命取り組んできたスポーツで世界と繋がっていきける「可能性」をまだまだ楽しんで行きたい



スペシャルオリンピックス日本2014福岡大会では表彰式でプレゼンターを務めました。

けれども、パチンコをしない人たちに对する絆づくりのアプローチによって「ピーアークはいいね！」を共有するというものです。

来マーケティングにつながるだろうと確信しています。ところで対談の御相手に必ずお聞きすることがあるのですが、有森さんはパチンコの経験はありますか？

有森 残念ながら、自分自身はないですね。大学時代に上手な先輩がいて、景品をたくさん持って帰っていましたね。そういえば、パチンコ玉を作る会社のご子息が同級生に居ました(笑)。

庄司 当時のパチンコはアナログスタイル。釘を見て出る台を見つけて弾く技術を持つ人が勝っていました。今、パチンコはICプログラムの塊で確率論です。逆に考えればビギナーでも勝てるチャンスがあるという事です。しかし3000万人いたファン人口は当時の1/3程度までダウンしました。その原因としては、時間当たりの消費金額の高騰もありますが、余暇時間をSNSやモバイル

社会をも動かす強いエネルギーをつくる

有森 もう待つ時代ではない

庄司 なるほど、障害者総合支援法などいろいろな法律が整備されつつありますが、社会がこういう形で、まさに「インクルージョン」みんなで助け合うという社会に向かっていきます。ダイバーシティな社会に向け、現状とのギャップをいかに埋めていくかが課題でしょうか。

と思います。社会の中で当たり前前の存在になろうと思えば、望む前に本当に自分たちの動きがここまでで良いのか考えなければなりません。「パラリンピアン」が以前よりもアクティブになり、自分たちから言葉を発するようになってきましたよね。彼らも自分達の成長をもっと見せるような動きを同時にしていかなないと駄目でしょうね。

つまりは、社会が動くのを待っているだけでは、物事は進まない。けれども、結局社会が動く瞬間というのは、強いエネルギーを感じた時で、その時には必然的に社会のほうが進んでくるを得なくなるはずだと思っておりますので、これからも積極的に働きかけていくつもりです。

しいて課題を上げるとするならば、指導者というのも皆さんボランティアで、指導者としてのレベルは様々です。無償で

やっていただけの人材は良くも悪くも色々な差が有るのが現状です。本当はその競技の高度な厳しさを教えられないレベルの指導者を揃えていかなければならないと思っています。それができれば、全てのアスリートたちのレベルを更に引き上げていくことができると思います。

庄司 社会とのつながり、絆の

パワーは改めて広く強いと感じています。そんなことを強く感じるのが、新規店舗ピーくんガーデンに併設した「コミュニティガーデン」や昨年10月にオープンした「ピーくんRoad」に新設した「シェア・プラザ」です。これは、店舗営業エリアに隣接した場所に「パブリックスペース」を設置したモデルなのですが、足立区のコミュニティサイトを通じて、ママ友会、カルチャー教室、地域ボランティアなど利用者のネットワーク

ゲームなどの時間消費に奪われているからだという意見もあります。そして今、業界は縮小する中、店舗はどんどん大型化しています。

そのような環境の中、当社は地域と信頼関係で繋がる店舗づくりを目指します。この領域はピーアークの得意技でもあります。これからもお客様と共に参加するチャリティー活動やボランティア活動を「Fun for Life」で続けていきます。

有森 活動を実際に経験していただいた方々に、体験したことを思い浮かべながら、本来の現場で活動の支援をしていただけだと、私たちも安心して頑張れます。支援していただける方すべてが活動に参加することを楽しく思ってくれるほうが、私たちにとても嬉しいことであると感じています。これからも応援をよろしくお願



パークハイアット東京にて開催された「スペシャルオリンピックス日本20周年記念」にて。

は日々広がっています。利用された方は「Weedroom」などのSNSを通じ、その場所での情報を拡散している様子が見受けられます。そのような利用者の行動様式から、社会と企業をつなぐ新しいマーケティングの可能性を発見しました。それは、今まで、パチンコをするお客様だけが私たちのマーケットであるという狭い視点から、同一のコミュニティに存在する

たします。
庄司 本日は貴重なお話、そして楽しいお話をありがとうございました。

(敬称略)



Profile

有森 裕子 氏 Yuko Arimori

1966年岡山県生まれ。パルセロナ五輪銀メダル、アトランタ五輪銅メダルに輝いたマラソンランナー。現在はアスリートマネジメント会社「RIGHTS.」取締役、日本プロサッカーリーグ理事、スペシャルオリンピックス日本理事長、厚生労働省いきいき健康大使等を務める。著書に『やめたくなったら、こう考える』(PHP研究所)、『わたし革命』(岩波書店)など。